ジェイムズ・ボールドウィンにおける「黒人問題」

斎藤忠利

アメリカ社会における「黒人問題」は、一般に、アメリカ民主主義の「恥部」と言われてきた。「恥部」とは、まことに言い得て妙であるが、「恥部」が「恥部」として認識される限り、それは、本来、隠蔽さるべきものとして理解されているのであって、このような理解に立つ限り、公民権運動その他に見られるような黒人解放運動が強力に押しすすめられ、公の場で「黒人問題」の解決を迫る要求が強く打ち出されれば、打ち出されるほど、「黒人問題」はタブー化され、私的、個人的な人間関係のなかでは、ますます隠微な形をとって、根強く、その問題性を残していくように思われる。

ところで、「黒人問題」に対するアプローチの方法としては、まず、G・ミュルダールの大著『アメリカのディレンマ』(Gunnar Myrdal, *An American Dilemma*) (一九四四年) に代表されるような、社会科学的なアプローチ、つまり、社会調査を基礎として、アメリカ黒人の社会生活の実態を把握しようとする方法が考えられるが、統計上の数字で人間を理解しようとする方法には、自ずから限界があろうし、タブー化していく「問題」の実態を、たとえばアンケートなどで調べ上げようとすることには無理があろう。そこで、ここでは、アメリカ黒人として白人優位の社会に生きる苦しみを見事に作品化してみせる、すぐれた黒人作家ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) (一九二四年～　) の発言を聞いてみようと考えるのであるが、以下の叙述は、あくまでも、「黒人問題」がどのようなものとしてボールドウィンに

おいて理解されているか、その一端を示そうとするものであって、ひとりの作家の直観的な理解が、どの程度の客観的な妥当性をもち、どこまで学問的な批判に耐え得るかは、充分な検討を要する問題である。もっとも、私見によれば、ボールドウィンの直観的な理解は、預言者的な洞察力をそなえており、聞く耳ある者には、充分聞くに値する。

さて、「黒人問題」に対するボールドウィンの立場のユニークな点は、ボールドウィンが、アメリカにおける「黒人問題」を、たんに「恥ずべき」ものとして受けとるだけに止まらず、三百年をこえる白・黒両人種の共同生活の体験を、ある意味では貴重な人間体験として積極的に評価し、この体験が今後の人類社会の発展に寄与し得る可能性を吟味しようとするところにある。そこのところを、ボールドウィンは、そのエッセイ集の中で次のように書く——

アメリカ人を他の国民から区別する特色の一つは、アメリカ人ほど深く黒人たちの生活にかかわりをもった国民は他になく、また、逆に、黒人ほど深くアメリカ人の生活にかかわりをもった国民は他になかった、ということだ。この事実と、それが暗に含む意味の一切とを直視するとき、アメリカの黒人問題の歴史が単に恥ずべきものであるにとどまらず、ちょっとした偉業でもあることが、わかろうというものだ。というのは、この上ない酷評がなされた場合でも、同時に、この問題が投げかけた絶えざる挑戦には、いつでも、なんらかの方法で、絶えざる応戦があったことが、つけ加えられなければならないからだ。正に、この黒・白の経験が、今日われわれが直面している世界において、かけがえのない価値をもつものになってくれよう。この世界は、もはや、白くはない。そして、二度と白くなることは決してあるまい。(1)

ことわるまでもなく、アメリカの白人種は、黒人奴隷の主人としてであれ、黒人種の圧制者、政治的・経済的な競争者としてであれ、アメリカ社会で、いわば黒人種との同居生活を送ってきた。このことは、アメリカの白人種がアメリカ社会でしか経験できない経験をしてきた、ということであって、この経験によって、アメリカの白人種は、人間として、質的に変化している。同様

に、奴隷としてアメリカに運ばれてきたアフリカの黒人種も、白人種との同居生活によって、質的に変化している。このようにして、同居生活の中で変質した白人種と黒人種は、お互いに離れがたく結び合わされた者として、ここに全く斬新な人間像を生み出していく可能性をもつことになった。このような情況を、ボールドウィンは、白・黒両人種の結婚という比喩で理解し、「アメリカ人」というものを、これから作り出すべき斬新な人間像として捉えることによって、白・黒両人種が協調すべき所以を、そのスピーチで訴える——

この世界において——全世界において——アメリカ黒人ほど、多くのアメリカ人を知り、アメリカ人を良く知り、また、これは奇妙に聞こえるかも知れませんが、アメリカ人を愛している者はいないのです。これは、アメリカ黒人が、わたしたちがこの土地にたどり着いて以来、すなわち、わたしたち、黒・白両人種がここにたどり着いて以来、あなた方を見守り、あなた方をだし抜き、あなた方と取り引きし、あなた方に我慢をし、時には、あなた方といっしょに血を流して死ななければならなかったからです——そして、これは、一種の結婚です。わたしが好むと好まざるとに拘らず、また、あなた方が好むと好まざるとに拘らず、わたしたちは永久に結び合わされているのです。わたしたちは、お互いの一部なのです。いつなんどきにせよ、この国のすべての黒人の身の上に起こっていることは、あなた方の身の上にも起こっているのです。……すべてのアメリカ人が一つだけ共有していることは、アメリカ人には、この大陸で達成されつつある自己同一性の他には、どのような自己同一性も持てない、ということです。……アメリカ人として自己同一性を達成する必要は、歴史的な、個人にかかわる現在的な事実で、このことによって、あなた方とわたしとは結びつけられているのです。(2)

もとより、このようなボールドウィンの発言を、その哲学的な抽象性と無邪気なまでの非政治性の故に、批判することは容易であろうが、アメリカ黒人を、アメリカ人がアメリカ人となるという、アメリカ人としての実存形成の協働者として位置づけ、そのことによって白・黒両人種の意識の変革を達成しようとするボールドウィン

の立場は、なによりも前向きの姿勢を示すものとして、高く評価されてよいであろう。

そもそも、ボールドウィンによれば、アメリカ社会の「黒人問題」なるものは、アメリカ社会の特殊性から生まれ、また、その社会の主要な構成員たる白人種がこれを必要としたことによって作り出され、白人種がこれを必要とする限り存続せざるを得ないものなのである。元来、アメリカ社会は、「丸太小屋から大統領へ」という言葉に示されるように、「成功」ないしは「立身出世」(=success)が理想とされる社会であって、その構成員は、たえず「上を向いて」歩こうとする。従って、アメリカ社会は、構造的に言って、その底辺が不分明な社会となり、構成員は、生存競争に破れて落ち始めることになったら、どこまで落ちていくのか見当もつかない、という心理的な不安に、たえず脅かされることになる。このような心理的な不安から、アメリカ社会の底辺を規定し、これを明確化して、それ以下には落ちてはならない、という一線を画する必要が生ずる。ここにおいて、アメリカ社会は、それまで奴隷として使用してきた人間を、その底辺に位置づけることによって、その必要を充たそうとした。こうして「黒人問題」は、すぐれてアメリカ的な社会的産物として作り出されることになった。

以上見てきたところは、ボールドウィンにおいて理解されている「黒人問題」の社会的、人為的な性格であるが、ここから導き出される結論は、アメリカ社会における「黒人問題」とは、その本質において、白人種の問題に他ならず、真に問わるべき問題は、「黒人問題」ではなくて、「白人問題」である、ということになる。(3)

このことと関連して論じられなければならないことは、アメリカ社会の白人種が抱いて優越感——白人優位の原則、という虚妄である。一般的に言って、アメリカの白人種は、ヨーロッパ文化ないしはアングロ・サクソン文化の継承者として、未開のアフリカから運び込んだ黒人種を教化することが自己の使命であると信じ、黒人種がヨーロッパ文化に同化することをもって黒人種は教化された、とする考えを持ち続けてきた。黒人種は、生物学的に言って白人種に劣り、人間よりも動物に近い存在として、見下げられ、憐れまれ、保護され、馴致されるべきものであった。ところが、このような黒人種に対する誤まった認識によって、白人種は、たとえば自己

の内部にもある動物性を黒人種に転嫁し、自己の人間としての問題性を黒人種の上に投影して、そのような問題性をかかえた真の自己の姿を見失い、白人種の優越性という虚妄の中で自己疎外をひき起こす。アメリカの白人種における、この自己疎外こそ、ボールドウィンによれば、「黒人問題」が「白人問題」たる所似であって、「黒人問題」解決への道は、アメリカ黒人が白人種の文化に同化されることによって切り開かれるのではなくて、むしろ、アメリカ黒人が愛情をもって、白人種が白人種の優越性という虚妄から覚醒するのを助けてやることから始まるのである。ボールドウィンは、預言者的な使命感を胸に秘めて、そのエッセイ集『次は、火だ』(一九六三年)の中で、次のように書く――(因みに、このエッセイ集は、二つの書簡を納めるという形式をとっている。)

親愛なるジェイムズ君、現在、君の若々しい頭の中で荒れ狂っている嵐をついて、「受容」と「統合」という言葉の背後にひそむ現実を、どうか確認するように努めたまえ。君が白人たちのようになろうとするいわれは全くないし、白人たちが、君を受け入れなければならない、とする無礼千万な仮定には、なんらの根拠もありはしない。いいかね、君、本当に大変なのは、君の方で、白人たちを受け入れてやらなければならない、ということなのだ。

わたしは、ごく真面目に言っているのだ。君は、白人たちを受け入れてやらなければいけない。愛情をもって受け入れてやらなければいけないのだ。なぜなら、それ以外に、このような無知な白人たちには、どんな希望もないからなのだ。(4)

このようにして、アメリカ社会の白人種が、アメリカ黒人に助けられて白人種の優越性という虚妄から解放され、黒人種の上に投影することによって直視することを避けてきた自己の問題性を、自己自身のものとして引き受けようとする時、白人種の自己疎外は克服され、白人種は、本当の意味において、自己を知り、自己を愛し、お互いに愛し合えるようになるであろう。そうなれば、「黒人問題」は、消滅する。白人種が、もはや、「黒人問題」を必要としなくなるからである。そこのところを、ボールドウィン自身の言葉に聞いてみよう――

この国の白人たちは、自己自身とお互い同志とを受け入れ、そして愛するすべを学ぶだけでも、ひと仕事であろう。そして、白人たちが、この仕事を達成した暁には——それが明日ということにはなるまいし、遂に来ない明日になることも充分あり得るだろうが——黒人問題は、もはや、存在しなくなるだろう。というのは、黒人問題が、もはや必要とされなくなるからだ。(5)

ところで、「黒人問題」がその本質において「白人問題」であるとする認識は、もとより、歴史的に言って「黒人問題」の産物たるアメリカ黒人が正にその「黒人問題」の被害者であったという事実を看過するものではない。白人種の優越性が一つの虚妄にすぎないものであっても、アメリカ社会における権力者が白人種である限り、その虚妄は、動かし難い事実として、黒人種の上に押しつけられるであろう。従って、アメリカ黒人は、白人種という他者の価値観によってしか自己を眺め得ない人間としてアメリカ社会に作り出されてくる。すなわち、アメリカ黒人は、生まれ落ちたその時から、黒人種が白人種に劣り、呪われた醜い存在である、とする白人種の虚妄を教え込まれ、白人種に軽蔑されている自己を自己自身でも軽蔑する、という情況に追い込まれる。こうして、アメリカ黒人は、烈しい自己嫌悪に苦しむことになるが、このような事態こそ、「黒人問題」によって惹き起こされた、アメリカ黒人の自己疎外に他ならない。ここに至って、アメリカ社会における「黒人問題」は、これを必要とした白人種と、また、その被害者たる黒人種とを、ひとしく、自己疎外に追いやるものであることが、明らかにされたが、このような二重の疎外現象を克服する道は、既述したように、方向としては、白・黒両人種が、「アメリカ人」という人間像を形成する協働者として、お互いを必要としている事実を認め合うことにあり、そして、そのためには、アメリカの白人種は、その優越性という虚妄から目覚める必要がある、とするのが、ボールドウィンの基本的な立場であった。

しかし、この道は、ボールドウィン自身も充分認めているように、不可能としか言いようのない至難な道である。ボールドウィンは、皮膚の色に価値を認めようとする迷妄から白人種を覚醒させ、アメリカの運命を変える

ためには、「力の限りを尽くす以外に方法はない」[6]と書き、その一方で、アメリカ黒人が、「アメリカ人」像形成の協働者になるためには、どうしても克服しなければならない数々の障害を、具体的に吟味しようとする。

それらの障害は、当然予想されるように、アメリカ社会において「黒人問題」が作り出され、その結果としてアメリカ黒人という社会的産物が生み出されるようになった歴史情況の中で、アメリカ黒人がかかえることになった問題であるが、その問題性の深さから言っても、ボールドウィン個人との関連の深さから言っても、最大の問題は、アメリカ社会というキリスト教文化の中で「黒人問題」が作られざるを得なかった事実に対する、黒人種としての深刻な疑問である。ボールドウィンにおける、この疑問の深刻さを理解するには、ボールドウィンの生い立ちを調べておく必要があると思われるので、これを以下に紹介しておく。[7]

さて、ジェイムズ・ボールドウィンは、一九二四年八月二日にニューヨーク市のハーレムに生まれた。キリスト教の説教師であった父のデイヴィッド・ボールドウィンは、実は継父で、ボールドウィンは、再婚した母親の連れ子として、ボールドウィン家の人間となった。家庭には、継父とその先妻との間に生まれた子供のうち、末の子のサミュエルが残っていて、父親の愛情を一身に集めていたが、ボールドウィンが八歳の時、十七歳になっていたサミュエルは、家をとび出してしまい、それ以後、ボールドウィンは、ボールドウィン家の長男として育てられることになった。ボールドウィンの下には、異父兄弟として、弟が三人、妹が五人ある。

このような子沢山で複雑な家庭の情況から充分予想されるように、ボールドウィンは、極度の貧しさと、継父の敵意の中で、その少年期を過ごした。継父は、溺愛していたサミュエルに裏切られたことから、ことごとにボールドウィンに辛く当たり、ボールドウィンが早熟で、感受性が強く、もの静かで、知能のすぐれた少年であることがますます継父を立腹させた。物心がつく頃から、ボールドウィンが継父から繰りかえし聞かされたのは、「お前は、醜い子だ」という言葉であったが、学校に通うようになってからも、小柄で眼の大きいボールドウィンの容姿は、ボールドウィンが学業にすぐれ、教師たちから賞讃されることが多かっただけに、学力の劣る級友

たちの嘲笑の的となった。こうして、高等学校卒業をもって終わりを告げるボールドウィンの学校生活は、ボールドウィンが、その家庭生活で感じていた局外者意識を更に強めるだけのものであった。ボールドウィンは、級友たちと交わることも少なく、ひとり読書にふけっては、ものを書くことによって自らの慰めとしていた。

ところで、ボールドウィンは、十歳の時、ハーレムを巡回中の二人の白人の警官に呼びとめられ、近くの空地に連れ込まれて身体検査を受けた。この屈辱的な体験は、アメリカ黒人の運命を支配している白人の権力に対する烈しい憎悪と言い知れぬ恐怖感とをボールドウィンの心に植えつかずにはおかなかった。そして、同時にまた、ハーレムの通りにたむろする淫売女や与太者たちが、性に目覚めたボールドウィンの脅威となった。ボールドウィンの多くの仲間たちが、酒を飲み始め、煙草を覚え、麻薬のとりこになり、性体験を始めて身をもちくずすようになると、ボールドウィンは、そのような危険からの避難所を、キリスト教会に求め、十四歳の夏に、苦しい入信の体験を通じて「救い」にあずかり、それから間もなく、高校生でありながら、説教師として講壇に立ち、三年以上もの間、教会生活をつづけた。この生活の中で、ボールドウィンは、信徒である黒人たちとの一体感を通じて、苦しくなるほどの法悦感を味わったが、この生活は、また、継父の支配を断ち切るための効果的な手段ともなり、説教師である継父を、その仕事の分野で打ち負かすことさえ可能とする生活であった。

しかし、破局は、来たるべくして来た。ボールドウィンは、説教を始めてから約一年後に、説教の準備のためにしばしば中断しなければならなかった読書を、もう一度はじめたいと思うようになった。そして、ドストエフスキーから読み始めたのが致命的だった、とボールドウィンは言う。しかし、この破局は、ボールドウィンが味わった入信の苦しみにおいて、すでに始まっていた、と言うべきであろう。その苦しみとは、ボールドウィンを「救い」に導いた神は、アメリカ社会に「黒人問題」の発生を許したキリスト教の神に他ならない、という意味において、結局のところ、「白い」神ではなかったか、という深刻な疑念である。この「白い」神を、黒人同胞に説くことは、黒人同胞を裏切ることではないのか。しかも、愛の神が説かれるべきキリスト教会に愛が存在せ

ず、キリスト教会が白・黒両人種の間で二つに分裂して、お互いに他人種を排斥し、憎むことを教えているのは、なぜか。

ボールドウィンは、教会の床に倒れたまま一夜を過ごしたほどの入信の苦しみを回顧して次のように書く――

わたしが実際に覚えているのは、苦痛、言葉に言いあらわせない苦痛だけである。それは、まるで、聞いてくれようとしない天にむかって、わめいているかのようであった。それに、もし天が私の言うことを聞きとどけてくれず、もし愛が天から舞い降って、私を洗い、私を浄めてくれるということが、あり得ないことだとすれば、それなら、完全な身の破滅こそ、私の宿命ではないか。そうなのだ。白人の国、アングロ・テュートン系人種の禁欲的な国に、黒人として生まれることは、たしかに大変なこと、言葉で言いあらわせないほどに大変なことなのだ。……そして、もし、人間的な愛情に絶望したら――誰しも絶望するはずだが――残されたものは、神の愛だけだ。しかし、神は――あの、だだっ広い床に横たわっていた、何年も前のあの時でさえ、このことは感じていたが――白い神なのだ。もし、神の愛がそれほど偉大であり、神がその子供となった人々を、すべて愛してくれるというのなら、なぜ我々黒人は、これまで投げ捨てられたままなのか。なぜなのだ。そのあと私は、いろいろと説教で語りはしたが、その床の上で回答は得なかった。少なくとも、その回答だけは得られなかった。そこで、わたしは、一晩中、床に倒れていた。わたしの頭上で、わたしを「改宗させ」ようとして、聖徒たちは、賛美の歌をうたい、喜び合い、祈ってくれた。朝になって、起こされた時、わたしは「救いにあずかった」ということだった。(8)

たしかに、キリスト教会は、ボールドウィンを、ハーレムの街頭の汚穢と頽廃から「救い」出した。しかし、ボールドウィンの「黒さ」は、白くならなかった。その上、黒人のキリスト教会で、白人種が悪魔の化身として憎まれていることを知ったボールドウィンは、二重・三重の意味でキリスト教に失望し、講壇から降り、高校を卒業してから、家出も同然の形で、ハーレムを飛び出し、しばらくニュー・ジャージー州で雑多な仕事に従事した

後、「二度とアメリカには帰らぬ積りで」パリに渡った。こうして通算十年にも及ぶボールドウィンのヨーロッパ生活が始まるのであるが、この生活の中で書き上げられた作品が、ボールドウィンの文名を確立した長編小説『山に登りて告げよ』(*Go Tell it on the Mountain*)（一九五三年）である。

この長編小説は、さきにふれたボールドウィン自身の生いたちをモデルにして、その宗教体験を客観化した作品で、十四歳の黒人少年ジョン・グライムズが「入信する」過程を中心テーマとし、そのテーマに立体感を与えるエピソードとして、ジョン少年の肉親――継父のガブリエル、母親のエリザベス、伯母のフローレンス――の、罪にみちた、暗い過去の生活が語られている。しかも、それらのエピソードは、ジョン少年が入信する夜の祈禱会で、それぞれ三人が祈りを捧げる際の回想として、フラッシュバックの手法によって語られ、それによってグライムズ一家の過去の生活が明るみに出される仕組みになっている。このことは、ジョン少年が、暗く深い人間の罪業を一身に背負った上で、その罪業からの贖いという魂のドラマを経験することを示そうとしたものに他ならないが、実は、ここに、白・黒両人種の関係に対する、ボールドウィンの、まことにユニークな認識が作品化されている。そして、その認識は、以上述べてきたボールドウィンの生い立ちと、その苦しい宗教体験の中からボールドウィンが摑み取った認識であり、キリスト教文化を中心とするアメリカ社会が「黒人問題」を必要としたことに対するボールドウィンの深刻な疑念を反映している。そこで、その認識を以下に吟味してみよう。

まず、『山に登りて告げよ』の基本的な設定として、主人公のジョン少年は、再婚した母親の連れ子として、継父ガブリエルの白眼視のもとで育つ、ということになっている。継父ガブリエルは、キリスト教の説教師であるが、暗い過去をもち、ここに、罪に悩む父親（継父）と、その父親から認知されない息子、という関係が成立する。この関係は、旧約聖書における、信仰の篤いアブラハムと、そのアブラハムがエジプトの奴隷女ハガルに生ませた罪の子イシマエルとの関係を連想させるが、この関係が、ボールドウィンにおいては、人間を奴隷として用いた罪業を過去にもつアメリカの白人種と、その罪業の被害者たるアメリカの黒人種との関係をあらわす象

徴として認識されているのである。こうして、アメリカ黒人を、西欧文明ないしはキリスト教文化ないしはアメリカ社会の私生児、つまり、罪の子として認識するところに、ボールドウィンの立場のユニークな点がある。そして、ジョン少年の姓を、「グライムズ」("Grimes")としているのは、ボールドウィンが継父から「醜い子だ」と言われながら育った個人的な情況と、その情況に象徴されている歴史的な事実、すなわち、アメリカ黒人が「汚れた者」とされてきた事実とを暗示し——因みに、「グライム」("grime")は、「汚れ」を意味する——、「汚れた」ジョン少年が「救い」にあずかるという設定は、アメリカ社会の私生児たるアメリカ黒人が、認知されずに見捨てられたままであってはならない、とするボールドウィンの主張を表わしている。(9)

このように『山に登りて告げよ』の中で作品化されたボールドウィンの認識については、ボールドウィン自身が、そのエッセイの中で述べているので、以下に引用すると——

とにかく、わたしは、わたし自身の成長の途上で最も危機的な時期が、自分が西欧の私生児のようなものであることを認めざるを得なくなった時に訪れたことを、知っている。わたしが、自分の過去を辿ってみた時、自らを発見したのが、ヨーロッパではなくて、アフリカであったからだ。そして、このことは、なにか微妙な仕方で、実に深刻な形で、わたしが、シェイクスピア、バッハ、レンブラント、パリの記念碑、シャルトルの大伽藍、それに、エンパイア・ステイト・ビルディングに対して、ある特殊な態度をもって臨んだことを意味した。これらのものは、本当は、わたしの創作品ではなかった。わたしの歴史を含んではいなかった。従って、その中に、わたし自身の影を探してみたところで、無駄であろう。わたしは、侵入者だった。これは、わたしの遺産ではなかった。しかも、その他には、わたしに利用できそうな遺産は、ありはしなかった——わたしは、たしかに、ジャングルや部族生活には適さなくなっていた。わたしは、この白人の世紀を流用しなければならない。それを自分のものにしなければならないだろう——わたしは、わたしの特殊な態度を容認し、このような、わたしの特殊な位置づけを受け入れなければならないのであろう——さ

もなければ、わたしは、位置づけるべきところをもたないことになる。[10]（傍点は筆者）

アメリカ黒人の私生児性――このことこそ、ボールドウィンによれば、「白い」神には見捨てられ、「白い」アメリカの罪業を一身に背負わされて生まれてきたアメリカ黒人の宿命的な性格である。そして、その性格を、ボールドウィンは、その個人的な生活体験の中から、深刻な疑念と複雑な痛みをかかえながら、摑み出してきたのであったが、アメリカ黒人を、「アメリカ文明の私生児」として捉えるボールドウィンは、だからと言って、アメリカ黒人の「家」を、アメリカの外に求めるべきだ、とは主張しない。アメリカ黒人が、アメリカ社会の私生児であるとするならば、そのアメリカ社会こそ、アメリカ黒人が、その息子として認知されるべき場所である――これが、ヨーロッパ生活の中で、ボールドウィンが学んだ教訓である。そして、ここから、この小論の冒頭で述べたボールドウィンの基本的な立場がうち出されてくるのである。

かつて、「白い」アメリカに烈しい抗議をつきつけた黒人作家リチャード・ライト（Richard Wright）（一九〇八年～一九六〇年）は、その代表作『アメリカの息子』（*Native Son*）（一九四〇年）において、「白い」アメリカがアメリカ黒人に加える心理的な圧力によって、黒人に好意を抱いてさえいる白人の娘を殺害する極悪非道な黒人青年ビガー・トマスを、「生粋のアメリカっ子」（"native son"）と呼んで、ビガー・トマスの犯行の責任を、ひたすら、「白い」アメリカに担わせようとし、白人優位のアメリカ社会において、アメリカ黒人がその自己実現を達成しようとすれば、それは、必然的に、反社会的な行動とならざるを得ない、としたが、このように、白・黒両人種の関係を、階級としての対立、加害者と被害者というような、あまりにも単純・明快な関係として捉えたライトが、結局、アメリカ社会からの脱出をはかり、パリで客死して、その烈しい抗議の叫びにも拘らず、アメリカ黒人をアメリカ社会の中に位置づける、という困難な作業のためには、殆んど何一つ、建設的な役割りを果たし得なかったのに対して、ボールドウィンは、ライトの抗議に抗議して、ライトの『アメリカの息子』をストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』（H. B. Stowe, *Uncle*

Tom's Cabin)（一八五二年）と対照しつつ、前者は呪いの言葉を叫び、後者は無情な勧告を述べている、と言い、次のように書く——

そして、実際、このような情欲と憤怒の網にとらえられて、黒・白両人種は、突き刺し合い、お互いに相手が、徐々に、うまく死んでくれることを願うことしかできないのだ——拷問、酸、ナイフ、むし焼きによる死。突き刺し合い。それを願うために、両人種の目をくもらせ窒息させる雲は厚くなり、そのために、両人種は、底なきところに、いっしょに落ち込んでいく。(11)

このようにライトを批判して、ライトの抗議は、白・黒両人種を、お互いに憎み合うようにするだけだ、とするボールドウィンは、積極的な発言として、白・黒両人種が愛し合うことを学べ、と訴える。（因みに、ここで言う「愛」は、必らずしも、キリスト教的な「愛」とは言えないであろうが、「愛」を説くボールドウィンは、やはり、キリスト教の中で育った人間である、と言えよう。）しかも、その場合、すでにふれたように、ボールドウィンは、白・黒両人種が離れがたく結び合わされ、いわば、結婚したも同然であるとする立場にたっており、その立場から、白・黒両人種は、愛し合って生きる以外に、生きる道は残されていない、とするのである。

そこで、『山に登りて告げよ』以後の作品において、ボールドウィンは、男色の問題をとりあげたり、白・黒両人種の男女の組み合わせを実験的にいくつも設定して、人間が、性の壁、人種の壁を超越して愛し合う可能性を探ろうとしている。これは、人間同志が共に生きることを喜び合って生きる可能性——共存の可能性を探ろうとするものであり、ボールドウィンが、その中で人間の共存の可能性を模索している長編小説に、「もう一つの国」という題名を与えていることは、(12)人間の共存を可能とする国の出現を待ち望むボールドウィンの悲願をあらわしているようで興味深い。そして、恐らく、ボールドウィンは、そのような「もう一つの国」への期待を、アメリカの将来に託しているのであろう。

そうであるとすれば、ボールドウィンにとって、白・黒両人種が手をたずさえて「アメリカ人」となる、ということは、白・黒両人種が、人間として共に生きること

を学んでいくことであり、アメリカ社会は、人間が共に生きることを学ぶ恰好の場ということになる。このような意味において、ボールドウィンにおける「黒人問題」は、共に生きることのできない人間一般の普遍的な問題とされていることになるであろう。

最近のボールドウィンは、小説家としてよりも、社会批評家として発言することが多いようであるが、ボールドウィンの最近作の一つ、戯曲作品『白人さんへのブルース』(*Blues for Mister Charlie*)(一九六四年)は、白・黒両人種間の憎悪の感情が惹き起こした実在の黒人青年殺害事件をモデルにした作品であるが、ボールドウィンは、アメリカ社会の人種問題を、白・黒両人種が憎み合わなければならないという、人間としての不幸——いわば、アメリカ全土に荒れ狂う大疫病として捉え、そのような絶望的な事態の暗さの中にも、なお光は存在することを証ししたい、と述べ[13]、まず、その題名によって、白・黒両人種の協調の必要性を暗示し——「ブルース」は、アメリカ文化に対する黒人種の貢献をあらわし、原題の"Mister Charlie"は、黒人種から見た場合の白人種の総称である——つぎに、白・黒両人種間の根深い反目・憎悪の中で両者の調停者の役割りを果たす人物(白人)を登場させ、この人物を、殺された黒人青年のための祈禱会に出かけようとする黒人たちの行列に参加させることによって、今後アメリカが進むべき方向を示唆している。

従来、アメリカ社会における「黒人問題」は、政治問題、経済問題ないしは社会問題として取り上げられ、また最近は、頻発する黒人暴動によって象徴されるような都市問題、ないしは、「豊かさの中の貧しさ」という特徴をもつアメリカ社会の貧困問題の一環として考えられ、その解決は大規模な貧乏追放運動の中に求められるべきである、とされるが[14]、ボールドウィンの立場からすれば、たとえ政治的デモクラシーないしは経済的デモクラシーがある程度実現しても、アメリカの白人種の間に、「黒人問題」を必要とする心理的な欲求が存続する限り、真の解決はあり得ないことになる。そこで、ボールドウィンは、アメリカの白人種は「黒人問題」を必要としたそもそもの理由を自らに問え、と主張する。そして、そこのところが、一九六三年の五月二十四日に、テレビのインタビューで、ボールドウィンが社会心理学者のケネス・B・クラークを相手に行なった対談の中で、

次のような形の発言になっている――

…この国の黒人の将来は、この国の将来とその明暗を共にしている。アメリカの人々が、永いこと虐待してきた余所者と対面し、その処置を行なって、これを抱擁するかしないかは、全面的にアメリカの人々とその代表者、全面的にアメリカの人々の責任だ。白人たちがしなければならないことは、そもそもの始めに黒ん坊を必要とした、その理由を、自らの心の中に探してみることだ。なぜなら、わたしは黒ん坊ではなくて、人間だ。しかし、わたしが黒ん坊だと考えられているのなら、そのことが必要とされていることになる。……もし、わたしが、ここでは、黒ん坊ではなく、そして、黒ん坊は、あなた方、白人たちが作り出したものであるのなら、その理由を探し出さなくてはいけない。この国の将来は、そこにかかっている。その問いを問うことが出来るかどうかに、かかっている。(16)

以上に見てきたところから明らかなように、ボールドウィンは、「黒人問題」を、単にアメリカ社会の破綻ないしはアメリカ民主主義の矛盾を攻撃するための道具として利用するのではなく、むしろ、アメリカ社会の歴史的な性格とその運命に深く結ばれた問題として捉え、この問題を本質的には白人種の問題である、としながら、同時に、アメリカ黒人をアメリカ社会に位置づけようとする方向で、その解決を考えていこうとする。その方向は、「黒人問題」を扱った古典的な著作とされるデュ・ボア博士の『黒人の魂』(William E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*)(一九〇三年)が見定めたアメリカ黒人の自己実現の方向の延長線上にあると言えるが、ボールドウィンの立場の何よりの強味は、アメリカ黒人の位置づけを、白人種とは切り離されたところで行なおうとするのではなくて、白人種と共に「アメリカ人」となる努力を通じて達成しようとするところにある。そして、第二次大戦後のアフリカにおける黒人種の国々の相次ぐ独立と呼応しつつ勢いを増し加えてきたアメリカ国内の黒人解放運動の高まりの中で、ボールドウィンの発言は、予言者的な情熱を帯び、奴隷解放宣言の発布後、百年もの歳月を経た今こそ、アメリカが人種問題の悪夢から脱け出るべき時である、と説き、この機会に、意識の高い白人

と，同じように意識の高い黒人とが，そのために，「お互いに恋人同志のようになって」果たすべき義務を果たさなければ，アメリカ社会は，その「黒人問題」を，火で焼かれる苦しみとして未永くかかえることになるであろう，と警告した(16)。ボールドウィンの姿勢が建設的であるだけに，白・黒両人種の間で，この警告に聞こうとする人が少なくないように思われるのも，極めて当然である。

(1) James Baldwin, *Notes of a Native Son* (1955) p. 175.

(2) *Idem, Nobody Knows My Name* (1961) pp. 136–137.

(3) 「黒人問題」がその本質において「白人問題」である，という認識は，必らずしもボールドウィンの独創的な見解ではなく，すでにG・ミュルダールは，『アメリカのディレンマ』の中で，この点を指摘している。*Cf.* Gunnar Myrdal, *An American Dilemma* (1944) "Introduction" pp. lxxv～lxxvi.

なお，黒人雑誌『エボニィ』("Ebony") は，一九六五年八月号において，「アメリカにおける白人問題」と題する特集を行ない，この問題を深く掘り下げている。

(4) James Baldwin, *The Fire Next Time* (1963) p. 22.

(5) *Ibidem*, p. 36.

(6) *Ibidem*, p. 118.

(7) 以下の記述は，主として，James Baldwin, "Autobiographical Notes" (*Notes of a Native Son* pp. 3～9.) *Idem, The Fire Next Time* 及び Fern Marja Eckman, *The Furious Passage of James Baldwin* (1966) に述べられているところを綜合したものである。

(8) James Baldwin, *The Fire Next Time* pp. 44～45.

(9) ここに述べた『山に登りて告げよ』の解釈については，Robert Bone, *The Negro Novel in America* (1965) の立論に負うところが多い。

(10) James Baldwin, *Notes of a Native Son* pp. 6～7.

(11) *Ibidem*, p. 22.

(12) *Cf. Idem, Another Country* (1963).

(13) *Cf. Idem, Blues for Mister Charlie* "Notes for Blues" pp. xiii～xv.

(14) この立場に立つ議論の一例としては，マイケル・ハリントンの『もう一つのアメリカ』(Michael Harrington, *The Other America*) (一九六二年) などが，あげられる。

(15) *The Negro Protest* (1963) "James Baldwin talks with Kenneth B. Clark" p. 13.

(16) *Cf.* James Baldwin, *The Fire Next Time* pp. 119～120.

(一橋大学助教授)